

## カタール・アル・サーニー家

中東問題専門家

前田高行

### 1. アル・サーニー家の歴史

(家系図 <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/3-4qataralthani.htm> 参照)



カタールは面積11,400平方キロメートル、秋田県よりもやや狭い国で、アラビア湾に突き出た半島部分を国土としている。同国の人口は93万人であり、GCC6カ国の中では面積は5番目、人口は最も少ない。しかも人口の6割強は出稼ぎ外国人であり、自国民は37万人前後にすぎない。

現在のカタールの支配者アル・サーニー家はアラビア半島のタミム族の支流であり、元々サウジアラビア・リヤド南方のジブリン・オアシスに住んでいたが、18世紀の初めにカタール半島

に移住した。当初半島の北部に定住していた一族は、19世紀半ば当時の族長ムハンマド・ビン・サーニーに率いられ現在の首都カタールに移り住み、彼がサーニー家の開祖となったのである。GCC6カ国の王家・首長家の中ではアル・サーニー家は歴史が最も新しい。

アル・サーニー家は隣国と領土をめぐって度々抗争を繰り返し、1867年にはバハレーン＝アブ・ダビ連合軍との間で大規模な戦闘が行われた。ペルシャ(アラビア)湾に進出していた英国がこの仲裁に入り、アル・サーニー家にカタール半島の支配権が認められた。こうしてムハンマドはオスマン・トルコ朝からアミール(首長)の称号を受け、初代カタール首長となったのである。第一次世界大戦でオスマン・トルコが英仏に破れ、ペルシャ(アラビア)湾における英国の覇権が確立したため、アブダラー第3代首長は1916年に英国と保護領協定に署名した。これによりカタールは英国以外に領土を割譲せず、また外交権を英国に委ねたのである。

アブダラーは1940年に首長をハマドに譲ったが、ハマドが1948年に亡くなった

ため弟のアリーが第5代首長となった。このとき彼は一族の長老の意見をいれて皇太子に故ハマド首長の息子ハリーファ（後の第7代首長で現首長の父親）を据えた。ところがアリーは1960年に病気を理由に退位するに当たり、首長を甥のハリーファ皇太子ではなく息子のアハマドに委譲した。これが後にハリーファによる宮廷クーデタの遠因となったのである。

カタルが独立したのは1971年9月のことである。その翌年、国家の実権を掌握したハリーファは、アハマド第6代首長のイラン訪問中にクーデタにより第7代首長の座についた。新首長は暫定憲法を公布、諮問評議会を設置して国内の民主化を推進する一方、1981年には湾岸6カ国によるGCC（湾岸協力会議）結成に参加、翌年サウジアラビアと相互防衛協定を締結するなど外交面では近隣諸国との関係強化を図った。彼は生涯に4人の女性と結婚し6人の息子と7人の娘がいるが、名門アッティヤ家出身の第一夫人の一人息子ハマド（現首長、1952年生）を皇太子に指名した。ハマド皇太子は国防大臣などの要職を歴任、1992年には財政を除く国事の運営を父のハリーファ首長から譲られるまでになった。しかしハマド皇太子はイラン、イラク及びイスラエルとの関係強化と言う独自の外交路線をとったため、サウジアラビアなど近隣諸国との友好関係を重視する父ハリーファ首長との間で権力闘争が発生した。両者の確執は限界に達し、ついに1995年、ハマド皇太子は父親ハリーファ首長の外遊中にクーデタを敢行、第8代首長の座に就いた。ハリーファは自分がかつて行ったと同じ手法で首長の座を追われるという皮肉な結果となったのである。

首長を追われたハリーファは隣国バハレーンのハリーファ家に庇護を求め同国に仮住まいしながら反クーデタの機会をうかがった。イラン、イスラエルなどとの関係強化を図るハマドがカタルの実権を握ることを快く思わなかったバハレーンおよびサウジアラビアはGCCの結束を重視するハリーファを支持した。これに対してハマド首長はバハレーンと国交を断絶し両国は長く険悪な状態が続いた。またサウジアラビアとの関係も緊張し、国境付近で度々戦闘行為が発生、ごく最近もカタルとアブ・ダビを結ぶ天然ガス海底パイプラインの敷設をめぐる、サウジアラビアはパイプラインが自国の領海を侵犯している、とクレームをつけたほどである。このようにGCCの新興国であるカタルは、ハマド首長の外交姿勢もあり、隣接国と数々のトラブルを抱えた状態を続けていたが、最近になって関係は改善している。なお長年にわたり息子ハマドと対立していたハリーファ前首長は2004年に和解し、10年ぶりにカタルに帰国した。

## 2. ハマド首長とその一族

1995年6月に父親を追放して第8代首長となったハマド現首長は1952年生まれで今年56歳である。彼は写真で見てもわかるとおり長身で恰幅の良い貫禄十分の風格を持っている。ハマド首長はこれまで3人の女性と結婚しており10人の息子がいる。第一王妃マリアムと第三王妃ヌールはいずれも一族のサーニー家の女性であるが、第二王妃のモーザはミスナッド家の出身である。彼女は抜群のスタイルと美貌を誇りファーストレディとして振舞っている。モーザ王妃はアラブ女性特有のアバヤと呼ばれる黒いガウンとスカーフをま

とっているものの、公の場でも素顔を見せ、国際会議の舞台でアナン前国連事務総長と並んで歩くなど(写真参照)、アラブ・イスラム諸国のファースト・レディとしてはきわめて特異な存在である。



モーザ王妃はカタル大学を卒業しており、美貌に加え知性も兼ね備えた女性である。彼女は慈善活動や教育活動などの社会活動に熱心であり、同国のマスコミには連日と言ってよいほどその活躍が報道されている。王妃はカタル国民の教育、研究及び社会福祉を増進することを目的に1995年に設立された「カタル基金(Qatar Foundation)」の会長であり、その本部は首都ドーハの「教育都市(Education City)」にある。このユニークな「教育都市」にはカーネギー・メロン大学やジョージタウン大学など米国の6つの大学の分校がある。カタルは教育の充実に力を注いでおり、地域の知的産業(Knowledge Industry)の中心になることを目標としている。また王妃はアラブ民主主義基金(本部:ドーハ)の会長でもあり、2003年には国連ユネスコ初等・高等教育の特別代表となっている。そして2007年には中東研究で有名な英国チャタム・ハウス賞を授与され、同年には米国のフォーブス誌により世界で最も実力のある100人の女性、また英タイムズ紙からは中東で最も影響のある25人の女性の一人にも選ばれている。

モーザ王妃は1978年にハマド(当時皇太子)と結婚し、二人の間には長男ジャーシム(1978年生)、次男タミーム(1980年生)を含め5人の息子と3人の娘がいる。次男タミームは皇太子であり2005年に一族のジャワハル王女と結婚している。三男のジャワーン王子は2007年に仏の士官学校を卒業したと報じられている。モーザ王妃の3人の娘のうち長女と次女はいずれもカタルの政府機関で働いている。長女のアルマヤッサ王女はカタル博物館の館長であり、11月に開館したイスラム美術館のお披露目でマスコミに華々しく登場している。妹のヒンディ王女も首長府の要職についている。

### 3. カタル内閣の王族閣僚

今年(2008年)7月にカタル新内閣が発足した。閣僚の人数は首相を含め21人であるが、このうち首相以下、国防相であるハマド首長自身を含めアル・サーニー家の王族が9人を占めている。GCC各国の内閣はいずれも王族が主要閣僚ポストを占めているが、カタルの王族閣僚の数は、バハレーン(24閣僚のうち半数の12人がハリーファ家王族)に次ぐ多さである。これは人口の少ない両国は政府組織が小さく、またさしたる産業がないため、王族を遇するポストが少なく、必然的に閣僚に登用せざるを得ない結果だと考えられる。王族閣僚の肩書と名前は次のとおりである。

肩書	名前
首相兼外相	ハマド・ビン・ジャーシム

国防相	ハマド・ビン・ハリーファ（首長本人）
内相	アブダッラー・ビン・ハーリド
内務担当国務相	アブダッラー・ビン・ナーセル
都市問題・計画相	アブドルラハマン・ビン・ハリーファ
保健相	ガリア・ピント・ハマド（女性、博士）
ビジネス・貿易相	ファハド・ビン・ジャーシム
内閣官房担当国務相	ナーセル・ビン・ムハンマド
国務相	ムハンマド・ビン・ハーリド

アル・サーニー家の王族は首相、外相、国防相、内相などの重要閣僚ポストを独占しているが、これはサウジアラビア、UAEなどのGCC諸国に共通した傾向であり、一族の結束により外交、防衛および国内の治安維持を図ろうとする意志の現れである。1995年のクーデタにより首長兼首相兼国防相となったハマドは、クーデタの翌年異母兄弟のアブダッラー（ハリーファ前首長第三王妃ラウダの息子）に首相の座を譲ったが、国防省のポストは手放さなかった。今年の内閣改造では首相がアブダッラーからハマド・ビン・ジャーシムに交替したが、このときもハマド首長は国防相の地位にとどまっている。ハマド首長が軍の統帥権を握り続けているのは、上述したように1995年に宮廷クーデタで父親から権力を奪取した後も反クーデタの動きに手を焼いた経緯があるからであろう。2001年に又従兄弟のハマド王子が反逆罪で処刑されているが、ハマド首長は今も一族内部の動きに不安を抱いているものと考えられる。

首相兼外相のハマド・ビン・ジャーシムは1959年生まれでハマド首長の遠縁（ジャーシム第二代首長の弟の子孫）である。そしてアブダッラー内相とムハンマド国務相はハマド首長の従兄弟で、二人は兄弟である。女性で保健相のガリア博士は国連ユニセフのカタル代表、人権国民会議のメンバー等を経て今回初入閣を果たした。彼女はハマド首長の姪にあたる。

ちなみにカタル内閣の女性閣僚は彼女のほか、初等・高等教育相のシェイカ・アハマド・アル・マハムードの二人である。またアブダッラー・ビン・ハマド・アル・アッティヤ副首相兼工業・エネルギー相はアッティヤ家の出身であるが、アッティヤ家はアル・サーニー家と並ぶカタルの名門でありハマド首長の母親の実家でもある。アッティヤ家からは副首相のほか国際協力担当国務相のハリド・アル・アッティヤも閣僚に名を連ねている。

#### 4．独自路線にこだわる外交方針

カタルはサウジアラビア、UAE、クウェイト、オマーン、バハレーンとともに「湾岸協力会議（GCC）」を形成している。GCC6カ国の中では国土の広さ、人口の多さおよびGDPの大きさをサウジアラビアが突出していることもあり、同国が強い指導力を発揮しており、カタルも経済統合、域内問題については協力姿勢をとっている。しかし外交について

かなりの独自性を発揮している。

例えば対イスラエル関係については1995年の故ラビン首相の葬儀に情報文化相を派遣、翌96年にはペレス首相(当時)が来訪し、カタルにイスラエル代表部が開設されるなど、他のアラブ諸国が一致してイスラエル・ボイコット政策を貫く中でもイスラエルとの関係を保つ意思を示している。また昨年12月、自国の首都ドーハでGCCサミットを主催したときにはイランのアハドネジャド大統領を特別ゲストとして迎えている。このようなことは他のGCC諸国ではまねのできないハマド首長の外交手腕であると言えよう。

米国との関係では1992年および95年に防衛協定を締結し、親米方針を明確にしている。そして2003年のイラク戦争でサウジアラビアが米国に対し自国基地からのイラク空爆を拒否し、戦後米国はサウジアラビア国内の米軍基地の閉鎖を決断したが、このとき米軍基地を受け入れたのがカタルであり、現在同国のウデイドに米国中央軍の前線司令部が置かれている。

このようにカタルが単に中東アラブ域内だけでなく世界を見据えた外交活動を行っているのはハマド首長の強い意志の現れである。そもそもハマドが宮廷クーデタで実父の首長位を奪った原因は保守派の父親がバハレーン、サウジアラビアなど周辺国との善隣外交を重視したのに対し、ハマド自身は国の近代化を目指すという考え方の違いにあったわけである。しかしハマド首長が全方位外交を志向した結果、個別の問題によっては近隣諸国と外交上の緊張関係が生じるケースも出ている。

その典型的な例として国連事務総長選挙をめぐり2年間にわたってカタルとヨルダンが断交した問題を挙げることができよう。即ち2年前の2006年にアナン事務総長(当時)の後任はアジアから選出することが決まっていたのであるが、韓国の潘外交通商部長官(外務大臣に相当)のほかヨルダンも中東アラブ諸国の代表としてザイド王子を担ぎ出した。ヨルダンの働きかけに対してカタルは当初から潘候補支持の姿勢を崩さなかった。最終的に潘事務総長が実現したのであるが、ヨルダンはカタルの対応に態度を硬化させ国交を断絶した。この問題は2008年11月にヨルダンのアブダッラー国王がカタルを公式訪問し2年ぶりに決着した。

なお同時期に行われた安全保障理事会の非常任理事国選挙ではアジア枠としてカタルが2年間の任期で選任されたのであるが、事務総長選挙におけるカタルの韓国支持はその後のカタルの国連外交に好影響を与えたようである。今年10月の国連総会でハマド首長がサブプライムに端を発した発展途上国の金融問題を討議する「金融と開発に関する国連ドーハ会議」の開催を呼びかけ、翌月開催された会議に潘事務総長が出席したことなどはその表れといえよう。但しこの会議そのものは米国を初め世界の主要国が参加せず極めて低調な結果に終わっている。これなどはカタルが国際会議を開催するための施設その他のハード面では世界的なレベルにはあるものの、会議を成功に導くにはまだまだ実力不足であることを示していると言えよう。つまり現在のカタルは国際会議の「貸席業」としては及第点であるが、主催国として果たすべき仲介役や調停役としての力量はまだまだなのである。

カタルはこのような国連を舞台とする外交のほか、中東北アフリカ地域の問題解決にも意欲的である。2007年にはイエメン政府とシーア派反政府組織の紛争を調停し、反政府組織のリーダーのカタル亡命を受け入れている。またリビアで幼児のエイズ感染に関しブルガリアの医師団が拘留された際、問題解決に尽力するフランスを側面的に支援し、サルコジ仏大統領から感謝されている。これによって築かれたリビアとの良好な関係は、カタル政府系ファンドQ I Aがリビアとの間で最近80億ドルの投資を案件を締結したことなど副次的な効果も生んでいるようである。

さらに今年5月には混迷が続くレバノン情勢解決のためドーハにキリスト教系とイスラム系の指導者を招いて6日間にわたる精力的な調停を行い「ドーハ宣言」が実現したが、これなどはカタル外交の大きな成果といってよいであろう。イエメンおよびレバノン問題についてはサウジアラビアがカタル以上に熱心に取り組んできたのであるが、カタルが具体的な成果をあげることができた理由は、サウジアラビアがイスラム教スンニ派の大国であるが故にイエメンのシーア派反政府組織あるいはレバノンのキリスト教勢力に警戒心を抱かせたのに対し、カタルは小国であり、またドーハに本格的なキリスト教会の建設を認めるなど宗教的にかなり中立的な色合いを打ち出しているからである。

このようなハマド首長の積極的な平和外交とその成果は国際的にも高く評価されるべきであり、もしノーベル平和賞が世襲の君主にも与えられるとすれば(これまでノーベル平和賞を受けた政治家は全て世俗政治家である)、彼は間違いなく候補者の一人と言えよう。

## 5. 国際イベントの招致とイメージアップ作戦

カタルは上記の「金融と開発に関する国連ドーハ会議」にとどまらず国際的な会議やイベントの招致にきわめて熱心である。2001年には後に「ドーハ・ラウンド」と呼ばれるWTO閣僚会議が開かれている。このときは会議開催の直前に9.11同時多発テロが発生したばかりであった。それまでのWTO会合で環境活動家によるデモなど種々の妨害行動があったこともあり、この時期に中東のカタルで開催することに殆どの参加国が懸念を示し、開催地をシンガポールに変更する方向が固まりつつあった。

しかしカタルは断固として自国開催を主張、ものものしい警戒態勢のもとで会議は開かれたのである。随行員として会議に参加した日本政府関係者の話では、各国閣僚は会議が開かれるホテルに缶詰となり、別なホテルに分散した随行員も会場とホテルをシャトルバスで往復するだけであったと言う。周辺道路は全て一般車両を通行止めにしたおかげでデモやテロもなく会議は無事に終了し、カタルは大いに面目を施した。

また2006年にはアジア大会がドーハで開かれ、カタル政府はこれも大成功であったと自画自賛している。人口わずか93万人、しかも自国民が37万人前後の国の規模としては豪華すぎるほどの各種競技場を建設し、大会運営も非常にそつなくこなしたのである。但しそれもこれも全てオイルマネー(天然ガスによる収入)のおかげである。競技場は金にあかせて海外の有名建築家と一流ゼネコンに造らせたものであり、競技の運営はオーストラリア

のイベント会社に丸投げしたのである。競技期間中は学校も官庁も休日とし、観客動員を図ったようであるが、国民は普段スポーツになじみがないため、サッカーなど一部の人気スポーツを除きいずこの競技場も閑古鳥が鳴いていたと伝えられる。

それでもハマド首長はアジア大会を開催したことに大満足であり、2016年のオリンピックに名乗りを上げている。彼にとっては会議やスポーツ競技の結果にたいした意味があるわけではなく、とにかく無名に近いカタルの名前を世界に売り込むことこそが最大の目的である。国際イベントの誘致は、あくまで国威発揚の道具なのである。

モーザ王妃の場合は、常々西欧から批判される民主主義、女性の社会進出、教育などの問題を意識した活動を行っている。女性の地位向上に関する国際会議を自国で開催し、あるいは既に述べたように「カタル基金」の会長、ユネスコ特別代表をつとめ、米国から6つの大学を誘致するなど、惜しげもなく資金をつぎ込んでいる。このため夫のハマド首長は私財30億ドルを投じて「カタル基金」の活動資金を捻出するファンドを設立したほどである。

王妃の民主主義、女性問題あるいは教育に関する実績は欧米でも一定の評価を得ている。例えば国連開発計画（UNDP）の人間開発指数（Human Development Index）では、イスラエル、クウェイト、バハレーンに次ぐ4番目に評価され、NGO団体「国境なきレポーター」による「報道の自由の指数」でもイスラエル、クウェイト、UAEに次いで4番目である。しかしその一方カタル国内を見るとクウェイトやバハレーンのような普通選挙が行われておらず西欧型の民主主義には程遠い。また女性の地位についても世界経済フォーラム（WEF）が世界130カ国を対象にした「世界男女格差報告」（2008年版）によれば、カタルは119位であり、クウェイト（101位）、UAE（105位）、イラン（116位）よりも低い評価が下されているのである。このように見るとハマド首長やモーザ王妃の言動はイメージ先行型の色彩が強いと言える。

## 6．後継者問題



ハマドは1995年に首長に即位すると同時にモーザ王妃との間に生まれた長男ジャーシムを皇太子に指名した。自分と同じアル・サーニ一家出身の第一王妃マリムとの間に二人の息子がおりながら、第二王妃でミスナッド家出身のモーザの長男ジャーシムを選んだのである。そして2003年には健康に不安があるジャーシムにかわり次男のタミムを皇太子としている。ハマド首長自身はまだ50代であることを考えれば、ジャーシムの健康回復を待つ余裕があったとも考えられるが、それにもかかわらず唐突に皇太子を次男のタミムに替えた理由はジャーシムの病気が重い糖尿病のためと言われているが、これら一連の後継者選任プロセスは部外者には計り知れないところである。

また今年7月に内閣の改造が行われ、ハマド首長の異母弟アブダラー首相（1959年生）が退陣し、同じ一族とは言え遠縁のハマド外相が首相を兼務することになった（上述）。公式にはアブダラーの首相退陣は彼自身の要請によるものだと報道されているが、彼はハ

マドより7歳も若く健康不安も報じられていない。アブダラーの引退によりハマド首長の異母兄弟あるいはその子息たち(つまり首長の甥たち)で政府の要職についている者は見当たらない。それでいてモーザ王妃の子供たちは娘を含め政府機関の要職に就いているのである。このことからハマド首長の後継者問題にはモーザ王妃の考えがかなり色濃く反映されているのではないかという推測も成り立つ。

これらの事実はともかくとして地元のメディアはタミーム皇太子の動静を連日事細かに報道しており、ハマド首長の後継者であることを強く印象付けようとする意図が明白である。28歳の皇太子の力量は未知数であるが、ハマドが健康で首長を続ける間にタミームが次期首長にふさわしい人物に成長すれば、彼は順当に後継者の椅子に座ることになるであろう。

以上